

『吾輩は猫である』進化論

Junko Higasa

第五章。『古代の神は全智全能と崇められている。ことに耶蘇教の神は二十世紀の今日までもこの全智全能の面を被っている。しかし俗人の考うる全智全能は無智無能とも解釈が出来る』このパラドックスを道破した者は天地開闢以来吾輩のみであろうと考えると、多少虚栄心も出るから是非ともその理由を申し上げたい。

耶蘇教では「神」が「人間」を造ったという事になっている。しかしチャールズ・ロバート・ダーウィン(Charles Robart Darwin)は観察や実験を積む中で、生物の「進化論」を展開した。「進化」というと語弊があるが、要するに生まれてから自然模倣する言語でさえ十年・二十年と経つうちに変化するように、生物は元の形から時間をかけて「変化」するというものである。彼は「種の起源(On the Origin of Species)」で「自然選択によって生物は環境に適応するように変化し、種が分岐して多様な種(様々な顔)を作る。そして環境適応に有利な個体が生き残る」というようなことを述べている。しかし神に呑まれている人間は「そんなことはない。人間は全能の神が製作した完成品であるから、そこから変化することなどあり得ない。神は最初から多種多様の顔を造ったのだ」と反論している。しかし立場を換えて見れば、平和に慣らされた日本人が世界で生き残るために、西洋人同様に戦って勝ち進みつつあるではないか。国家という一方向へ向いていた日本人が、西洋化社会で生き残るために、各々の利潤を追求して競争を始めているのではないか。このような顔の変化は、彼ら人間社会で昼夜間断なく行われつつあるのに、人間は平面に目が二つ並んでいるから、物事の半面しか視野に入らぬのは気の毒な次第である。もし神が悉皆焼印の御かめの如く同じ顔を作り得たならば、それは神の全知全能を表明するものであり、今日このように目まぐるしく多種異様な顔を生じせしめたのは、却ってその無能力を推知し得る具ともなり得るのである。そのように神の手際を疑っていたところへ、好男子水島寒月君と瓜二つの泥棒が現れた。『神もこんな似た顔を二個製造する手際があるとすれば、決して無能を以て目する訳には行かぬ』彼らは才能や環境の違いに拘らず同じ顔を有しておく。従って神は形で判断するように人間を造っておらんのである。また人間も同じ変化を遂げるとは限らない。もし形しか見ず心を見ないとしたら、活動小切手は善悪の区別なく投資するだろう。賢明な者ならその先どんな事件が起こるか想像がつくだろう。

吾輩は日本の猫であるから勿論日本最良である。日本の安寧を念じるという点において、東郷大将と心と同じくする者である。軍人の国家貢献のように形に見えなくとも、ローマの亡国論を挙げて日本の将来に心を砕き、脳内は猫一倍激しく活動しているのである。しかし形を見て心を見ざる多々良三平君が、吾輩を休養以外に能のない愚物のように罵ったのは気掛りである。やはり形で示さないと鍋の具にされかねない。だが吾輩は軍人同様、活版(face)において日本に影響を及ぼせる大事な体である。鍋の中で成仏する訳には行かん。そこで吾輩は東郷大将に倣って鼠を捕る決心をした。しかし実戦は理論通りにいかん。吾輩は軍人の才能がないのかしらん。心は同じでも行動において純粹の模倣はかくも難しい。吾輩は目に見える顔だけ真似して表面だけの大和魂を叫ぶより、目に見えぬ形で日本の魂を守ることを択ぶ者である。(2016.2.16)